

道路は濡れて、滑りやすくなっていた。だがチェルニーは思った、捻挫をしてもかまわない、三十メートル先の女にこれ以上離されて、見失うよりはましだ。スラニーの説明を彼が正しく理解したとすれば、その女は一世紀半も前に死んだフレデリック・シヨパンと交信しているということになる。そんなことがあり得るのだろうか……。もし仮に十年前の一九八五年、だれかが彼に向かって、十年後の一九九五年十一月一日、万聖節の陰気な月曜日には、お前はもう秘密警察の一員ではなく、領土の半分を失い、あまつさえ資本主義に転向したチェコという国で私立探偵をするはめになっているだろうなどと予言したなら、チェルニーは己の未来を呪ったことだろう。そしてそのだれかさんに、同じく、お前は十年後、シヨパンが死してなお数十もの作品を作曲し、それらをシヨパン本人の口から直接聞き取り、書き留めているという噂の、元学校給食センター職員の子の動向を探ることになって、いるだろうなどと言われたなら、男のなかの気まぐれな部分が目を覚まして、よくよく考えてみると、

未来に想いを巡らすのもそう悪くはないと内心思ったことだろう。しかも件の女が、何年も前に自分が尾行していた反政府組織の厄介な構成員の未亡人だと教えられたなら、彼は国家秘密警察と私立探偵のちがいはあるにせよ、その将来の仕事のなかに、公証人たちが親から子へと代々伝える研究にも値するような連続性を見つけたことだろう。

そう、その女と女のもとを訪れる幽霊は、旧体制下、夜遅くまでカフェレストランにたむろしていた反体制派の人間たちとは違い政治には関わっていなかったもので、チエルニーは新鮮な気持ちで仕事ができた。かつて、あの忌々しい反体制者たちをシヨボイ車のなかから長時間監視しつづけていたために、彼はたちの悪い気管支炎にかかってしまった。子どものころから、この秘密警察StBのスパイは気管支が弱かった。

チエルニーが尾行していた女の名声はボヘミアの古い山々を越えて、少しずつ外の世界にも広まりつつあった。女の名前は二十六年前の結婚を期に、ヴェラ・フォルティノヴァーとなった。一九三八年六月のある日に生まれたときはヴェラ・コワルスキーと呼ばれたことなどだれも覚えていなかったが、この一九九五年の万聖節の日、彼女は五十七歳だった。

女が再び視界に現れたとき、このStBの元スパイは安堵のため息をついた。彼女が今朝家を出て以来、彼の視界からしばらくの間女が姿を消したのはこれが初めてではなかった。そうした「空白」の瞬間が訪れる度に、この種の距離をとった尾行は過去何度も経験しているにもかかわらず、彼は冷汗をかいた。その後、冗談が好きそうで、ぼつりとしたシルエツトが再び彼の前に姿を現すのだった。もしそれだけのことなら、彼は喜んでゲームをする気になっただろう。

午前の半ばから、彼女はあちこち歩きまわった。この一週間、探偵は立ち止まることになかった。今や道路の先が見通せるところに来ていたので、少しは安心できるだろうと思つた。二度と見失うことのないよう、もう少し距離を詰めようとしていた。彼女はどこに行こうとしてゐるのだろう。確かなことはひとつだけ、家に帰ろうとしてゐるのではないということだ。というのも、彼女は家とは反対の方向へと歩いてゐたからだ。まもなく昼だ……。彼女が食料品店に入つたのを見て、彼は息をつき、タバコに火をつけながら、束の間の一服を喜んだ。そのとき、新しいことが分かりしい状況をまとめて報告するように、とジャーナリストに言われていたことを思い出した。数メートル先に公衆電話があるのが見えた。二度目の呼び出し音で受話器が取られた。

——こちらチェコテレビ、ルドヴィーク・スラーニ。

——パヴェル・チェルニーだ。電話をするよう言われていたのでね。今、女は店で買い物をしてゐる。それで、ちよつとだけ時間ができた。女は十時前に家を出て、オルシャニ方面に向かい、夫の墓に花を供えた。今はヴィシエフラド〔かつてはブシエミスル家の第二の要塞、現在は城址公園。チエコの著名人の墓地〕のすぐ近くに來てゐる。

その後しばらく話をしたあと、彼は急に話を中断した。

——これで切る、女が店から出てきた。また菊の鉢植えを買つたようだ。予想してゐた通りだ。歩きただした。後でまた時間ができたら電話する。二度とまかれたくないからな。